



大学と同窓会

広島工業大学 学長
茂里 一紘

同窓生の皆様、お元気でご活躍のこととお喜び申し上げます。同窓会の皆様には、日ごろから、同窓会奨学金基金など母校の事業にご協力いただき感謝申し上げます。

小生、この4月より、櫻井前学長の後任として学長職を拝命しております。いつまでもこのようなことを言っていてはいけないのですが、他大学からの転職でまだ戸惑うことも少なくありません。しかし、広島にある工業系私立大学として本学の果たすべき社会的使命をはっきり意識して職務に当たりたいと念じております。

私学では、建学の精神による学風が大切です。本学には、「教育は愛なり」という建学の精神がありますが、「人を大切にすること」学風があるように感じています。建学以来、前理事長のお考えが浸透しているものと思います。「人とのかかわりを大切にすること」と言ってもいいでしょうか。その意味では、同窓会を大切にすることは本学の学風そのものです。

4月19日に開催されました同窓会総会に初めて出席させていただき、一夕にして長年本学に在籍していたような気持ちにさせられました。6月28日の高知支部の集まりにも出席させていただきました。3月卒業したばかりの社会人1年生が同窓生として仲間入りしておりました。今後とも都合がつく限り各地の同窓会には出席させていただきたいと思っております。10月11日には長崎支部のホームカミングの集いがあると聞いております。

「現代の高等教育」（大学教育を始めとする高等教育に関する学術誌）の419号（2000年6月）に、「大学にとっての同窓会」という特集が組まれています。その中で、国立学校財務センター天野郁夫氏は同窓会の役割を歴史的に概観しています。「同窓会は第一義的には同窓生の親睦団体である」が、同窓会によっては、「大学の支援団体であった」り、「事実上の設置運営主体になっていた場合もある」（例：慶応大学）とのことです。また、「大学の成長・発展のための苦難の道」の中で、「教員や学生たちだけでなく、同窓生も積極的に参加した」「たたかう同窓会」もあったとのことです（例：明治大学）。しかし、大学の拡大とともに、「同窓生同士の絆も弱いものになり」、「同窓会は親睦団体としての性格をますます強めるようになった」、「新規卒業生の同窓会加入率が、年々低下しているという声」もあり、「同窓会の歴史的使命は終えたように見える」と。しかし、そうした変化の中で、「私立大学が、同窓会の重要性を再評価しはじめて」おり、「大学と同窓会の間に、いま新しい関係をうち立てる必要な時代がきていると見るべきかも知れない」と結んでいます。同窓会の再評価です。



早稲田大学の事例の中で、「母校は校友（卒業生のこと：筆者注）にとって社会的背景ともいえるべきものであり、そして母校の名声は、社会の舞台面に活躍する一人ひとりの校友をスポットライトのように引き立てる

役目を果たすのである。その逆に、校友の社会的評価は直ちに母校の名声に反映するものであり校友の学業や地位が高まることによって、母校の名声はますます輝くのである」という大濱信泉元早稲田大学総長の言葉が紹介されています（前掲誌、村上義紀「早稲田大学校友会の昨日・今日・明日」）。それはどこの大学にも当てはまることです。

先日同窓会総会で、私は、「皆さんから戴いた4年間の授業料は4年間に限るものではない、4年間の授業料には卒業後も本学に出入りすることや大学との関係を持つための費用も含まれている」と申し上げました（「私は7年納めました」というOBがいました）。大学とそこで学んだ者との関係は4年間（7年間？）で終わるものではなく、卒業後も続くものであるということと言いたかったのです。ちなみに英語で卒業生のことを「Alumni」と言うことがありますが、本学の酒見先生の説明によれば、語源はラテン語のalere（辞書の見出し語はalo）で、1）養育する、育成する、2）（家畜を）飼育する、3）助成する、進める、上げる、増す、成長させる、で、その過去分詞形が名詞化したものだそうです。大学と同窓会は、互いに養育しあいそしてともに成長しあうと、勝手に解釈しています。

そんな視点から、大学でもいろいろなことを検討してもらっています。「生涯にわたって卒業生を支援する一手段としての同窓会」という考え（前掲誌、長島 昭「慶応義塾大学」）もその一つです。現在検討中の「エクステンションセンター構想」での卒業生向けのキャリア・ディベロップメント・サービス（新しい分野の勉強、再就職斡旋など）がそれにあたります。産学連携については、「母校とOB経営者を結び橋渡しとなる」という同窓会からの提案で既に動き出しております（「広島経済レポート」2003年4月3日号）。今後、さらに情報を共有できるようにしたいと考えています。

同窓会の母校への貢献も「エクステンションセンター構想」からみでいろいろ話しあわれています。ボランティアとしての母校の教育への関与、各地区にあつての支店的役割などです。長年続けられている同窓会奨学金基金はずばらしい貢献です。

ところで、このたび長崎支部がホームカミングの集いをもちます。世話をしておられる小西先生には、3月の卒業式にあわせて卒業後25年組のホームカミングの実施ができないものか検討をお願いしております。卒業後の25年には、OB一人ひとりそれぞれいろいろな歴史があることでしょう。その貴重な歴史を携えて、卒業式に参列してもらおうというものです。社会へ巣立つ若者の式典でのそのようなOBの陪席は、学長の式辞以上に、卒業生に多くのことを語ることでしよう。OBには、これから社会に巣立つ若者の晴れがましい姿に25年前の自分を重ねてもらっていいのです。あるいは、一堂に会した1000名の若者の「勢い」を感じてもらっていいのです。それは、若者を抱える大学なればこそ与えることができる、社会の第一線で活躍するOBへの「銀卒式」のメッセージです。巣立ちの若者と貴重な歴史を携えたOBとの卒業式を是非とも実現したいと願っています。

もちろん、同窓会の第一義的に重要なことは親睦です。特段排他的になることはありませんが、多感な青春時代を同じキャンパスで共に過ごし、共通の経験を持つ気心知り合った者同士で語り合うことは何と素晴らしいことでしょう。その意味でも同窓会はずっと活用されてもいいのではないかと思います。

「人とのかかわりを大切にすること」は、時間に耐え長く続けば続くだけ、その価値を増します。まさに同窓会そのものです。50年を迎えようとしている学園にあつて、互いに養育しあいそしてともに成長しあう意味で、本学の同窓会はいまや佳境に入りつつあると言ってもよいでしょう。

卒業生の皆様のご健勝と一層のご活躍を祈ります。